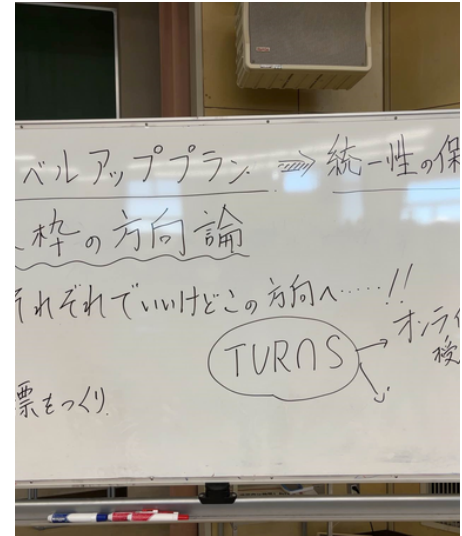


## 「教育課程論」通信

vol.03

## 2コマの流れと記録

不動産広告にみられる「小学校の人気さ」にはどのような意味が含まれているのか、その人気はどこまで学校の高さを表しているのかについて、導入として考えてみるころから始まりました。「家を買うのは一生のことで、子供が生まれると想定すると30代から40代の層が対象かも」などの声が。ニュータウンの小学校や山間部の小学校など4つのタイプの小学校のうち、どの学校が魅力的でどの学校に自分の子どもをいれたいかということについても意見を交わしました。各学校にはそれぞれの地域の事情や子ども・家庭状況があり実情が異なるなかで、「統一性重視」と「多様性重視」とのジレンマと対峙し、どのように統一的な質保証を担保しているのかを少し考えました。難しい問いで苦悩を抱えていたところに、東広島市教育委員会から指導課の指導主事の方がかけつけてくれ、3コマの時間に教育委員会でどのような取り組みを行っているのかを聞くことができました。行政として統一性を担保するべく数値などの「評価」を実施している実態を知りました。そこで、「評価」に対して私たちはどのようなイメージをもっていて、そもそも何のために評価をしているのだろうかというところへと深く考えていく4コマになりました。「評価」のイメージを形容詞一語で表してみると「難しい」「厳しい」「冷たい」「堅い」などがあがりました。ではなぜこのような負のイメージが強いのか?ということ意識しながら、評価には「判定」としての評価と「改善」としての評価があること、「履修主義」「修得主義」の考え方があることを、自分たちの体験してきた「評価」を振り返りながら学んでいきました。私たちは判定として評価をイメージしやすいため、「厳しい」などのイメージをもちやすいのかもしれませんが、改めて学校評価について考えてみると、どうやら学校や組織では説明責任としての数値等評価として機能している面もあることがわかりました。



板書の一部

## 学生のふりかえりコメントより

～ふりかえり①と②に対する学生コメントをいくつかもってきました^^～

私は外国につながる子どもたちが日本語わからないかゆえに認知や思考が出来てもテストの点数が取れなくても修得主義であるべきだと思う。もし彼ら彼女たちが今後日本に住み続けて将来日本で働くことも視野に入れているのであれば日本語が出来なくてもしょうがない、かわいそうだ、という考えで済ませてしまおうと今後子どもたち自身が自分でもっと大変な思いをして日本語を習得したり勉強したりすることになり、負担が増えることになると思う。ただ完全に子どもたちの努力だけでなく教員のかかわり方や教育の提供の仕方にも工夫が必要だとは思う。

定時制高校の生徒の件に関しては、教員は全面的なケアといった観点から履修主義的な判断を下していると考えられるが、就職したのちのことを鑑みると課題に置いて授業に出なかったというのは就職後におけるあらゆる困難に対応する力が充分に身につけていないまま社会に出てしまうことになる可能性がある。そしてそれは大きなデメリットになると考えられる。そのため私は成績を与えるという判断には反対である。また外国の子どもの件に関しては、まだ日本人と同じ基準で評価することができるほど日本語の知識や技能が身につけていないため、現段階で厳格にテストの点を評価することは不適切であると考えられる。

「学校の評価」は、学校や行政が、外部の人たちの評価基準に合わせて学校の評価を提示するためにアンケート結果などの数値を使いながらある程度厳密に行うべきだと考える。学校内の職員や教育委員会などの同業者は授業観察や協議会といった言葉で学校の実情などがわかると考える。しかし、保護者などの教育現場外にいる人たちは参観日などで子供たちを見て何の力が備わっているか、どのように成長しているかわかりにくいと考える。そのような人たちに実情をわかりやすく共通の評価基準で示すために数値を用いる必要があると考えるし、その場合は実態をできるだけありのままに伝える必要があると考える。

グループワークで自分はどういう理由・根拠からそう判断するかというのが交差されていて、それを踏まえたコメントも多く、意見が深まっているように思いました^^

数値の評価に加えて、「言語」での評価というのも提案している人が何人かいました! どうしたら「価の違った評価」の短所を補ったり改善したりできるかの提案をしてくれているコメントも多かったです

学校の評価の数字はどこまで現実なのかかわからないと個人的には思っている。授業への取り組みなどについて、児童が本当の自分とは違う回答をしている場合もあるし、学校側も何を判断基準にして自分の行動や学校の様子を評価しているかはわからないし、その基準は多少異なると思うからである。事実との差異が少なからず生まれてしまう(しかも、それも事実よりも良いように出る)ような数字での評価をわざわざ表に出すというのにはある意味やさしい評価なのかもしれないと思った。個人的には、行政がある程度踏み込んだうえで、学校の良い面を証拠として世間知ってもらうために、数字での評価に加え文字での評価も併せて行うべきだと思った

私は、個人の評価に比べて学校単位での評価に数値が使われることが多いのは、数値で示さない学校のような大きい集団での評価はできないからある程度の冷たさは必要なのかもしれないと考えていました。でも、話し合いを続けるうちに優しさも必要だと思い始めたけれどどうまくまどまらず、最後発表してくれた「数値は嘘をつかないけど嘘つきは数値を使う」という言葉に納得しました。そのため私は学校の評価は行政が、学校の手や学校のために、結果をしっかり数値では示しながらも学校の全体としてのクオリティを保つためのある程度の優しさを用いながら行うべきだと考えます。

## 編集後記

指導主事をゲストに招いてコンテンツを深めていったり、東広島市の実態を知ることができたなかで、各学校、総合的な学習の時間を中心に地域と組んで、SATAKEを見学したり、田植の実践をしたりと、各学校の地域の実情にあわせて「活かして」学校ブランドをだしている点が印象的でした。パラレルで行政が実はバックアップをして、多様性と統一性の担保をしているなんて、また、評価に関してここまで議論していくことは私自身もこれまでなかったもので、皆さんのグループワークやふりかえりをみながら、「なるほどなあ」と思うことも多々ある有意義な時間になりました。ありがとうございました。また来週!

[制作・編集 馬越々椰(教育課程論TA)]

## 南浦先生の今日のひとこと

今回は第1回に出てきた「多様性と統一性の双方の担保」の話を広げながら、「評価」の問題も一緒に考えていきましたね。評価ってほんと難しい!でも、評価ってものすごく実務の世界なのです。だからこそそれを知っておくことは案外「授業」よりも重要だったり… 悩ましい出口の問題だからこそ、それを見極める眼をもっていきましょうね!